

広島文教国文往来

横山 邦治

○遼寧一号で大連から瀋陽までノンストップですが、十三時四十分から十七時四十分までの四時間の長旅、指定席は四名指し向いで中にテーブルがあつて、熱いお茶が提供される、サービスなのです。指定席は満席で、沢山の人が大移動しているのです、行く先々で中国の人口の多さを実感するのです。小山も見えない大平原の中の大都会、瀋陽の駅に降りると人の波、駅前待つ貸切バスにたどり着くまでに人の波濤に呑み込まれそうになってしまうのです、人口約五百万という大都会です。ですから当然なのでしょうが、人の熱気に圧倒されて息苦しくなる有様です。瀋陽のガイドさんは日本語が上手で安心、鳳凰飯店というホテルに直行です、北陵（清帝国の二代目の皇帝皇太極夫妻の陵墓）の側にあるホテルです。北陵公園の入口の前の道路傍に野天の店がエンエンと並んでいます、衣料品を中心に食料品その他雑貨類が多様に店開きをしてい

て、沢山の人が群がっています、夕刻ですのて勤め帰りの人なのでしょう、庶民の群衆です。その人だまりの間を抜けてバスはホテルに直行していくのです。途中に大変に外観が立派なロシア風ホテルが見えましたが、中ソ友好当時の大ホテルだそうで、今では不便で使用に耐えないということ、外国人は泊らないとガイドは申しおりました。ソ連時代の中ソ関係と今の中日関係の熱の度合いが何となく感じられるガイドの説明でした。○生水は絶対に飲んでほならないとの申し渡りしてありますので、飲食物には随分注意してきていました。日本の食事に比べると、全てに油が強くて困っていたのですが、瀋陽ではあまり体調の変化はありませんでした。鳳凰飯店は大連のホテルより設備が整備されており、サービスも十分、ベッドの枕元には桃が一ヶ置いてありました。日本の桃と違って固くて少し渋味のある小型の桃でしたが、

サービスとてありがたく頂戴いたしました。そしてガタンガタンの列車の長旅と人波疲れで、その夜はグッスリと寝込んだのですが、その夜中に腹中で油濃い食事と生の桃とが異変を生じさせつつあつたようです。八月三日は終日瀋陽見学にあててあります、書道専修生の研修旅行ですから、大変良質な書跡が蔵されているという遼寧省博物館を最初に訪問したのでした。徐先生の紹介で大変な歓迎も受けたのですが、目的の名跡は見る事が出来ませんでした、実は前夜から突然の大雨となり、その湿気が紙質を傷つける可能性があり、その湿度が紙質を傷つけていただけなのではないかという事なのです。私にはよく判りませんが、清朝の皇帝の集めた名品が多くあるようなので、日比野先生たちは残念無念の表情でありました。展示場には原始時代から現代に至る時代区分に従って品々が陳列されているのですが、唐三彩や明代とか清代とかの陶器の逸品が数多く収蔵されているようです。ところで別棟に土中から発掘されたらしい数多くの金石文が陳列されているのを見て、日比野先生たちは生き返ったように目を輝かせて、銘文と説明板とを一枚一枚写真に収録

する作業を始められました。東北地方の土俵たちの墳墓などから発掘された銘文が多いようでしたが、日本に未紹介のものが多くいかで、学生諸君総動員の作業となったのでした。

私は手持ぶさたで、奉天派軍閥の頭目張作霖の執政府の建物とかを見廻っているうちに、観光客相手の土産物展示場に入ってしまった。どうも観光客の来る所に観光客相手の土産物のお店があるようで、この博物館内の土産物店には日本語の上手な若い女性従業員が沢山見られます。瀋陽大学の卒業で朝鮮族の女性が過半らしく、親族を頼って日本に留学すると目を輝している人もいました。日本はなんだか理想郷のごとくでありますが、経済的な成功がそのようなイメージを与えているのでしよう。日本語がよく通じるので、中国語も何も外国語は一向に珍扮漢な私にとっては、気楽に日本文化談義が出来るのでした。憧れの日本が、彼女たちに失望を与えなければいいかと願ったことです、何だか彼女たちの期待に応えられないのではないかと、バブル崩壊後の日本のオタオタぶりをしている私どもには思われるのでした。冷戦構造のもとに与えられた平和の中での経済的繁栄という

のは、自からの理念によって求める平和とは異なる、ひ弱い平和の中での繁栄だったのかも知れないのです。

○昼食後に故宮見学です、清朝発祥の地に建てられた宮殿で、清の太祖ヌルハチが建設居住し、二代太宗ホンタイジが北京に遷都するまでの皇宮だそうです。パンフには、約六万㎡の敷地内に十三年の歳月をかけて造営された九十以上の建築群は、黄色のルリ瓦をいただいて美しい。とあるのですが、中国風に巨大という感じの宮殿ではありません、漢族を征服する前の宮殿だからでしょうか、中国風を模しながらも、少しチマチマという感じの宮殿でした。明朝を亡ぼす前の拠点としての宮殿で、満洲族独特の軍事組織（旗といつて、八つの軍団で組織されているようです。）を具現している配置とのこと、沢山の見物人で賑わっていました。ところが故宮見物中に腹の中に異常が発生してきて、便意急迫であります、片隅に有料のトイレがあつて駆け込んだのですが、有料とは申しまして中国流トイレで何とも落着きません。遠雷のごとき鳴動とともに噴出する液状の黄色糞は、流出速度が異常で、新幹線のもぞみ並みであ

ると感じました。腹痛らしきはないのです、とにかく腹中の異物を排出したいという欲求のみに身をさいなまれ、液状糞に宮殿のルリ色瓦も連想したことです、原因不明。大連の歓迎宴以来、油いための濃い味の料理が続いた上に、昨夜のホテルのサーブス精神旺盛なる小型桃が引き金になったのでしょうか、以後は一日中四・五回同じような超特急的腹中異物流出現象が停止せず、困却。聞いてみると、ガイドを含めてほとんど全員が同一の身体状況であつたようで、最後まで健常者であつたのは一人だけであつたとかで、中国の食事は予想以上に大変な現象でありました。翌日、北京空港に到着した時には、一人の女子学生さんがブツオレて意識不明となり、緊急入院という次第。異変に気付きながら我慢しているところということになるようです、当方は何とかかくのごとくのなかりしことを天に謝するのみでありました。何か身体に異常を感じながらの旅というのは、観るものが何か宙に浮いてフワフワしているという感じで頼りないことでした。笑止千万な事態であります。

○故宮見学の後は市内観光やショッピングで

ありましたが、有志十数名がタクシーを利用して瀋陽郊外の福陵参詣を企画、福陵は清の始祖ヌルハチの墳墓です。瀋陽の東の郊外に在るので東陵とも呼ぶようです、二代目太宗夫妻の陵墓を北陵と呼ぶのと対になるのでしょうか。北陵（昭陵とも）はホテルの窓から眺められる広大な陵墓ですが（時間がなくて内に入ることが出来ませんでした、心残りです）、それに比すると福陵は小規模のようです。でも清の初代の皇帝の陵墓ですから、

さすがに広大な敷地に皇帝の事跡を満州文字と漢字で並記した顕彰碑を覆ふルリ瓦の巨大建築を囲む塀がグルリと長く連なり、長い参道をどこまでも歩かなくてはなりません。行き止まりの塀の上の歩道を進んでいくと、楼閣の向うに土盛りの巨大な墳墓が見えます。中国風の建築群が建ち並んでいるのですが、墳墓は簡明な土盛りの小丘であるようでした。丘の中には多くの遺品が収納されているのでしょうか、盗掘も何もなく未公開のままなのでしょう。城内をテクテク歩いていると汗が吹き出してきます、朝は大雨であったのに午後は快晴で気温急上昇、中国大陸の気象条件は島国とは大分違うようでありませう。中国

の観光客は悠然とコーラなんかをラップ呑みしながら散策、私ども日本人はアッチコッチとチョロチョロ走り廻っています。対照的な民族性を感じられるのでした。大群衆がゾロゾロ移動する瀋陽市内に待機してもらつていたタクシーでユーターン、鳳凰飯店では水一杯にも注意しながら、異常信号を発する腹部を撫でながら、早々に就寝という次第でありました。とにかくすさまじい人波に圧倒された一日でありました。

○八月四日は空路で瀋陽から北京へ移動というところで、早朝から出発準備、朝食は瀋陽の空港レストランでというせわしない日程です。腹部異常を気にしながらの空港レストランというのは落着かないもので、まずはトイレの所在を確認してからお粥主食の朝食です。中国では朝食の常用はお粥のようです。身体変調でもエネルギーを補給しなくてはなりませんので、体調との調節をとりながらの食事はむつかしいものであります。少しでも油ツ気のある副食は避けながらのバイキングですが、中国では油ツ気ない副食はほとんど見当らないというのが実情で、大連より瀋陽の方が一層その傾向が強いという感じであります。と

もあれ瀋陽の空港を八時十五分発で北京空港は九時四十分着、福岡から大連へ向うのと同じぐらいの時間ですから、中国大陸は広大なのであります。上空から下界を見ようとしても広漠たる雲海で何も視認できません、黄河の端ツコぐらいいは見えるのかなという期待は空振りです。北京空港に着いてバスで移動中に一人の学生が卒倒、下痢を我慢していたのが限界に達したのでしよう、空港の人に救急車を呼んでいただいで即入院です。すぐに付添いの希望者が出てくれて助かります、友情は尊いことで、今後の研修を犠牲にしての付添い申し出なのです。一応は一安心でバスで天津に移動です。大連のバスは使い古した中古車でしたが、瀋陽では少し見かけのよいバスとなり、北京では大変に立派なバスとなりました。経済的発達度が地域的に偏りがあるのでしようか、広大な国土ですから止むを得ないのでしよう。北京空港から一路天津に向います、若い緑の並木がえんえんと続く平坦な大地を南下するのです。見渡せる限りの樹木は、巨木とか古木とかではなく、鬱蒼とした森林というものも見られなくて、若木といった感じのものばかりがスクスクヒョロヒョ

口と集中的に植付けられているという景色です。涯しない平原に同じような風景がどこまでも続くのですから、最初は物珍らしくてキョロキョロ周囲を見廻していたのが、結局は睡魔におそわれることとなってしまいました。中国でも上海と北京に次ぐ人口を有する天津市内に入ると、古い平屋建ての練瓦造りの民家が次々と取りこわされている現場があらこちに現れるようになります、再開発ということなのでしょう。その取りこわされた民家から追い出された人々がたむろしているかと思われほどの人波が、街の中に湧くがごとくに溢ふれています。人人人の波です、人間の集積に圧倒されてしまいます。こうした人々を統合していくことの為政者の苦勞も大変だと思ふのですが、一党支配というのが何時までも続くのであろうかと疑問ともなってくるのでした。天津では天津芸術博物館と北寧公園を訪問する予定でしたが、博物館は休館で見学出来ないとかで、公園の各所に掲げている書額を探訪することを研修とします。そこには近代の色々な文人墨客の書が掲額してあるというのですが、中国の政治状況の変動によって最初掲げられていた書が外

されていたりしているらしく、当初の目的通りの研修とはならなかったようです。結局は書画骨董古書などが展示してある街に出かけて、あれこれ物色することとなりました。一応おつきあいするのですが、体調が今一つで、何となく上の空であります。ホテルに帰って寝ることが第一という有様。天津凱悦飯店という外資系の立派なホテルに止宿です、ホテルは立派ですが食事は外ですというところに問題があるのかと思うことあります。食事は、朝食はホテル内のバーベキューの中華料理なのですが、昼食と夕食は外部の食堂を利用するのです。旅行業者の方針なのでしょうが、それが下痢症状の一因ともなっているのでしょうか。衣食住は人間にとってそれぞれ大切ですが、食に関しては民族性の違いということも考えて十分注意しておかなくては、快適な旅を続けることは不可能のようです。芭蕉が『おくのほそ道』という東国の未知の国の長旅をいたしまして、難路やら悪い宿やらで何かと苦渋の思いをしているようですが、食事のことで困却したという記録はありません。南北に細長い日本の国で封建社会でしたから、風土的に民俗的に何かと変化はあった

に違いないのですが、食生活においては貧しいながらも平均化していたということでしょうか。現在では衣も住も世界的に共通性が高くなって、旅をするのに異和感はあまり抱かなくてすむのですが、食生活というのは相当の違いがあるようです。日本と同文同種の国である中国、米などを主食とするのは同一であるはずなのでありますのに、米飯は原則として朝食の時に粥が出るだけ、夕食時に少し米飯が出ることもあるという感じで、白米飯に漬物・梅干だけでも満足しているという貧しい日本食の基本とは違うようであります。水が悪くて真水が飲めないということと、食材を全て油で炒めてあるというのが一般であることとは、そこに何か食材に対する共通認識があるのかなと思うことがありました。ともあれ痛みはあまりないので、今まで経験したことのない水状の軟便が続くのは、何とも鬱陶しくて快適なるホテルの一室に閉ぢ籠りたくなる事態でありました。天津の夜の町は眺めることもしませんでした。○八月五日、バスにて天津から北京へ移動、体調不全でウトウトしている人が多いのですが、私自身も何となく気力不全症で周辺の景

色もあまり目に入らない有様です。天津行の時にも見た変化のない平原の風景が続くのですから、目をやる気持も失せてしまっていたでしょう。北京郊外にある長城飯店という大きなホテルに止宿するのですが、当日のメモを見ると「天津より北京也。午前中静養、大当り也。下痢也。車中ウトウト。北京歌舞。」とあるだけです。元気な人は北京見学もしたのだと思うのですが、とにかく静養第一で、「北京歌舞」というのは、夕食の時に京劇まがいのショウを見学したということだと思います。どうも私にはショウはピツタリと参りません、美男美女の軽快な歌舞で、それはそれで価値があるのでしようし、中国的娯楽として楽しまなくてはならないのでしようけれど、体調不全も手伝ってでありましょうが、芸術的鑑賞眼なき心性を暴露した結果となつてしまったのであります。

建造物も一寸工事は雑かも知れないと見ることです、とにかく写真で見るとく平板で巨大な建物です。人民大会堂の前を抜けると約四十万平方メートルと世界最大の広さを有する天安門広場、天安門事件の起きた現場ですが、今はあの時にTVの画像で流れた凄惨な様子は全くうかがえなくて、私どものような外国人からの観光客を含めてゾロゾロと湧き出るような群衆が五つの門楼の中央に掲げられている巨大な毛沢東主席の画像を見上げているのを見た。「中華人民共和国万歳」と向つて左側に、右側には「世界人民大団結万歳」と巨大な字が掲げられているのも写真で見ると通りで、赤壁に浮き上った画像と字幕を見ながら一寸は一安心、見るべきを見たという感じでありましょうか。人民英雄記念碑とか毛主席記念堂とか労働人民文化宮などが広場の周辺に点在するのですが、時間的制約と興味があまりないこととて一同省略で、テクテク限りなく歩きながら故宮の中に入つて行きます。外国の観光客と中国人民の人波でゴツタ返していただきます。紫禁城の外朝部分の太和殿、中和殿、保和殿と見めぐるだけで大変な時間がかかりますので素通りという有様、権力の象徴とも言

える太和殿の大理石の礎石部分の精緻さと大きさとは、漢民族の民の力を示して余りありと思うことです。ラストエンペラーで見た龍の彫刻が浮彫になつている中央階段に直接手を触れると、歴史が一挙に凝縮されて目前に展開される感があります。左右にある宮殿（一寸した展示物があります。故宮の収蔵品というのでもなくて、大したものではなさそうでした。）にも足を運んでウロウロしている間に疲れ果てて石垣に腰を下しているうちに同行の案内人の姿を見失つて大慌て、急いで後を追うと両側に高い朱色の壁がそそり立っている通路を通り抜けることとなりました。アレアレと思つているうちに裏門に出ています、時間がないというので内廷見学省略ということとしたようです。この内廷に博物館としての展示物があるようなのですが、省略とは芸のない話であります、負け惜しみで神武門から内側を覗いて見たのですが、巨木と岩石の庭園らしきが見えて生活の臭いがいかほどか感じられました。出発ですとせきたてられてそれ以上は内部に入れませんでした、外朝と比べると内廷には権力誇示とは異なる人間の営みがうかがえたのでしようが残念でした。

再訪を期するほどの興もないことですので、千載一隅のチャンスを逸したのかも知れませんが。案内人に連れられてではなく、一人で地図片手に歩き廻るべきところなのでしょう。○体調不良の者数名、午後の北海公園などの見学を取り止めてホテルで休養ということになりました。私自身は少し休んでみて、北海公園よりも天壇を見学したいと思っておりますので、タクシー（中国のタクシーは黄色の小型車で乗り心地はあまりいいものではありません。）に乗りますと、勝手知ったる道でもグルグルと裏街道を通って長城飯店です。街路樹の日陰にゆったりとした身ごなしの人たちが屯している街路は、表通りの喧騒に比べると静寂という感じでした。平屋練瓦造りの民家は、油の染み付いた壁面を見ても生活の臭いが充満しているようですが、内面まで踏み込むことは出来ずに素通りです、内廷も民家も見たいところでした。ホテルにたどり着いて部屋に入ろうとすると、スッキリとした身形で大柄な目鼻立ちのハッキリした美女がスツと室内に入ってきて、英語でペラペラ話しかけてきます。ホテルの従業員というのではなくて、何かサービス提供を申し出

ているようでもありましたが、当方はとにかく休養したい一心でありますので、言葉も判らないままに室外に退去していただきました。着替えをしてベットに横になったところで、今の女性はその道の方であったのかなあと思えども、後の祭りであります。社会主義国ではありましても、開放政策を採用せざるを得ない中国の国情は、この種の女性を生んでいけるのでありましよう。英語が出来て利発そうな女性でしたから、恐らく教育のある人なのでしようが、私にその道の方という誤解を与えるような行動をとるに至ったのには、それなりの人間的道筋があったに違いないのですが、それを探究するを得なかつたのは心残りなことであります、所詮は融通のきかない朴念仁ということであります。結局は起き出す元気もなく、天壇見学も不可で、憂鬱な北京の第二夜でありました。

しも十分ではないと思わざるを得ない外観でした。江戸時代までは日本の学問の先達であった中国の大学教育の現在を知りたいものですが、今はその余裕はありません、一寸残念なことでありました。万里の長城に向います。随分郊外に向って走って山地にかかったところで、超満員の列車とすれ違いました。新疆ウイグル自治区と北京を結ぶ長距離列車らしいのですが、とにかく窓から溢れ出さんばかりの超満員です。服装も多様ですので、色々な人種の人たちが北京を目指して集まってくるのでしよう。多民族国家の中国の姿を反映しているのでしようが、同時に中国経済の開放政策がこのような活性化をもたらしているのではしよう。大変なエネルギーがそこには感じられるのですが、日本の敗戦直後の復員軍人から闇商人までギョウ詰め満員列車をも連想したことでした。窓から降り降りする実体験がありますだけに、その超満員ぶりは他人事ではないのです。狭いバス道路も渋滞で大変です、日曜日ですので観光客も多いのでしようか。とにかくバスやタクシーや各種雑多な車で大混雑、ユルリユルリと八達嶺の観光名所に到着であります。八達嶺の長城遺跡

はモデル的に修復されたものようですが、それにしても紀元前五千年という悠久の昔から北方民族の匈奴侵入防衛のために營々として構築した防壁であります。匈奴などどうも中国人の周辺諸民族に与える命名には中華意識丸出しで感心しません、とにかく漢民族には蛮族ではあつても、馬という機動力を駆使して強い軍事力を有する北方民族に対する恐怖心が築かせた、想像を絶する防衛施設です。防衛施設として必ずしも万全でなかったことは、金、元、清という北方民族による中国支配が実現していることから証されるのですが、とにかく巨大にして壮大なる防壁構築物であります。多種多様な観光客が群をなして万里の長城の観光ルートを登っているのですが、外国人の観光客より人民服姿ではない中国人の姿が圧倒的に多いのが印象的です。記念品の押売り（Tシャツとかメダルとかの数多い長城グッズ以外に、金キラキンの銘柄時計とか日本の銀貨など申すものまでが売り付けられていました、何となくマヤカシ的でありました。）やら何やらで、喧騒極まりありません。城門をくぐって左側の主要構築物のあるという急坂を登り始めたのです

が、中途の望楼で登攀中止と決定、若い人はドンドン登っているのですが、当方にとりましては息切れしてきたのと前途遠遠という感じがしてきたからです。樹木の少い岩山が涯なく続く山並みの嶺々を縫って城壁が築かれているのですが、その彼方に頂上の望楼があるわけですから、足がすくんでしまうわけがあります。途中で四囲を見廻すことですが、日本では見ることが出来ない荒涼たる山並みが地の涯まで続いています、盛夏なのですが緑が少いのですから異質なのです。山と言えば、日本アルプス級の二千米以上の高山は別として、落葉樹にせよ常緑樹にせよ真夏には鬱蒼と繁茂して地肌が見えないというのが日本の常識なのです。日本でしたら、この万里の長城の色なのです。日本でしたら、この万里の長城の城壁は、濃緑の樹葉によって覆い尽されている可能性さえあるでしょう。若い人たちはサツサツと頂上の望楼まで到達しています、私どもは城門外に櫛比する土産物店で少憩です、丁度昼食時で、土産物店の片隅で中国風食材を摂取する人たちを横目に、体調不良の身体を宥めすかしながら明の十三陵に向います。北京から西北五十キロの天寿山麓一帯が

明の十三陵が点在するところ、公開されている定陵前の食堂に一直線、途中で写真などよく見る石碑坊や石人・石獸の列をチラチラ見ながら素通りであります、時間がなかったのでしょうか。戦前大東亜共栄圏なるものが喧伝されて、中国や東南アジアを紹介する文献が沢山出版されて、少国民である私どもそんな文献の中の写真に親しんだのですが、そんな中でも印象深い石獸の列を傍観しながら素通りというのは味気ないものです、石人・石獸見学も料金別納ということで節約ということでもあったのでしよう。広い食堂で食欲皆無の昼食をすませて定陵の地下宮殿見学、明十三陵で発掘されているのは定陵だけで、大明帝国第十四代の神宗万曆帝（朱翊鈞、在位一五七二〜一六二〇）と二人の皇后考端・考靖の陵墓です。正門の陵門から明楼までが広い中庭になっていて両側に展示室などが建っています、一九一四年の火災で失なわれた稜恩殿という大きな建物があったところのようです、明楼の裏の方に地下宮殿の入口があります。夏でも涼しい地下宮殿なのですが、中国人民とでも言うべき人たちが陸続と見学に来ていて、その人波で地下宮殿に降りる狭い

階段は熱気ムンムンです、中華の民の文化遺産を誇り高き民が楽しんで居るのです。庶民の生活に余裕が生じて居るのでしょうか。地下宮殿には、皇帝一家が死後においても霊界に君臨すべき空間を造営して居るのです、後殿から中殿へ、中殿から前殿へと玄室が続いて居るのですが、大理石づくめの築造技術は大変なものです。皇帝の無駄な費えと言えませんが、人民の血と汗の結晶なのですが、それにしてもその財力と技術力は目を驚かせます。案内人から時間制限をうるさく言われて通り過ぎるだけに終るのは残念千万、中庭に出た時に一人で定陵博物館に飛び込みました、これだけの遺跡の展示場としては何とも粗でありましたが、定陵発掘の歴史を知ること出来ます。チケットに「定陵、是明朝第十三帝朱翊鈞及兩位皇后的陵寢。建于公元一五八四年至一五九零年。經考古人員發掘、于一九五七年七月成功地打開了埋藏地下近四百年的玄宮。一九五九年九月三十日就原址建立了定陵博物館、由郭沫若親筆題寫了館名。一九六一年三月被列爲国家重点文物保護單位。博物館内展出了許多珍貴的歷史文物、堪稱中国古代藝術寶庫。」とプリントしてあります。博

物館の入口に掲示してあつた看板が郭沫若の書だというのです、確かに特長のある郭院長の書体でした。そう思つて見ていますと、市街地の街道名とか橋名とかに近時の権力者の筆になるものが多く掲示されています。中国とは字が書けないと一人前ではないのでしょうか。もっとも汪兆銘とか蒋介石とかいう署名を見ることは出来ませんでしたので、中国の権力者の歴史的推移はそのままこのような公共的名称の書の署名者に反映するのでしょうか。それが政治的中国の現実と言えるのでしょうか。ともあれ定陵以外は発掘されて居ないようです、現代中国の保存技術では発掘しないのが賢明でありましょうが、まだまだ見るべきは沢山あるのです。残念ながら時間制限で十三陵ダムや成祖永樂帝の陵墓である長陵などを案内人の口上だけで北京市街へ向います。文房具や骨董品のメッカと言う琉璃廠街で自由行動、眼識なくしてただウロウロです。夕食は北京ダックの試食ですが、体調不良の胃腸は必ずしも歓迎せずでありました。北京郊外観光の一日は盛沢山でありましたが、時間制限が不満をかき立てるのでした。

○八月八日の月曜日は帰国の日です、昼前の離陸なのですが、朝から北京空港行です。ところが時間がきても飛行機が飛びません。北京空港は国際空港なのでしょうが、決して豪華な施設ではありません、冷房も必ずしも十分でないのですが、そこで数時間の待ち時間というのは大変な精神的肉体的拷問であります。伝聞情報によると大連空港が大雨で使用不能と言うのです、洪水的な水勢で空港が水びたしだとのこと、快晴の北京では信じられない情報です。日本でも北海道と沖繩とでは決定的に天候は変わっているのですから、広大な中国大陸において大洪水と快晴が同居するのは当然であります、何か騙されている感じがします。大連經由で福岡空港行きの便ですから、大連の空港に着陸出来ないというのは、北京空港を離陸不可と判るのですが、情報不足の中で狭い待合室のカタイ椅子に坐り続けるのは難行苦行であります。体調必ずしも万全でないということも加わるのですから、閉口頓首であります。数時間後に大連空港には寄らないで直接福岡空港に向つて飛ぶという事になり、その許可が得られたら離陸するとの情報が入り、とにかく本日中に帰国可

能ということだけは判明してヤレヤレと一安心でありました。この情報が入ってきて又暫く時間が経って機内搭乗の案内です、搭乗後に離陸するまではどうなることやらと不安だったのですが、離陸してしまえばこちらのもの、何とか帰国できるのであります。窓外から見える中国大陸は広大な平野がどこまでも続いています、飛行機は南下を続けて巨大な揚子江が見えてから上海上空で急旋回、そこからは海上飛行となりました。大連空港使用不能のおかげで、北京から上海までの中国大陸を眼下に見ることができたのは不幸中の幸いでした。中国から日本に向うには大連經由でない時には上海上空經由となるようですが、海上飛行となつてからは渦を巻いた雲海に突入してしまいました。中国大陸上空でもその心配はあつたのですが、機体がブルンブルンガタガタと大震動、台風が北上している圈内に入ったのです。スチュワードさんが機内放送で機体は安全ですがシートベルトを着用して下さいと云うのを聞いて、安心すると同時に恐怖心が湧いてくるのです。奄美大島あたりからは安全飛行という感じ、台風圏内から脱出したのでしよう、随分時間がお

くれて夕景の海波です。ところで搭乗後に機内食が出されました、全日空ですから当然和食の弁当なのですが、それを頂戴した途端に胃腸の鳴動が停止いたしました。胃腸薬が弁当に仕込んであつたわけではないと思うのですが、本当にピタリと鳴動停止であります、私だけではないようです、アチラコチラで感動の嘆息が聞こえていましたから。あの体調不良というのは、精神的なものも加わっていたのかも知れませんが、少くも私自身はあの機内食以降は全く体調が平常になつたのですから。福岡空港は夜だというのにむし暑い熱帯夜の様相を呈していました、でも日本の国ですからどの顔にも生気が帰っていました。中国金石研修旅行はこうして終つたのです。○国文学科の書道専修に新しい先生が加わつて下さいました、森下弘先生です。森下先生は昭和五年十月二十六日生れで、昭和三十年三月に広島大学文学部国語学国文学専攻を卒業後、永年広島県下の高等学校で国語と書道の教師として教育に専念されたのですが、平成二年四月に島根大学教育学部に書道・書道教育の助教授として就任、同年七月に教授昇任、平成六年三月に同大学を停年退職さ

れるまで、書写・書道教育の優れた実践者として書道界の教育指導に尽してこられました。森下先生には歌集『美しく伸びし水銀柱』有文社一九八四年刊や詩集『ひろしまの顔』青磁社一九八三年刊、『緑色の会話』一九九三年刊の著書があり、元来詩人的資質のお方なのですが、その清新な文学世界的内的充実がその書写の世界にも反映していて、漢字と仮名のそれぞれを重視しながらもその二つを調和させた、いわゆる調和体と呼ばれる作品世界を新しく構築され、書写者として教育者として数多くの業績を積み重ねてこられたのでした。森下先生の温厚篤実なお人柄とともに、先生の輝かしいお仕事は、本学の書道教育に有用な効果を与えていくに違いありません。同時に先生には、昭和二十年八月六日午前八時十五分に広島市上空で炸裂した人類最初の原子爆弾による被爆者という体験を有しておられます。その人類史上始めてという痛烈な体験は、先生の人格形成に大きな影響を与えたに違いないのですが、私どもはそこから大きく学ぶべきことあるのを感じるところです。

平成七年八月十一日記 横山 邦治